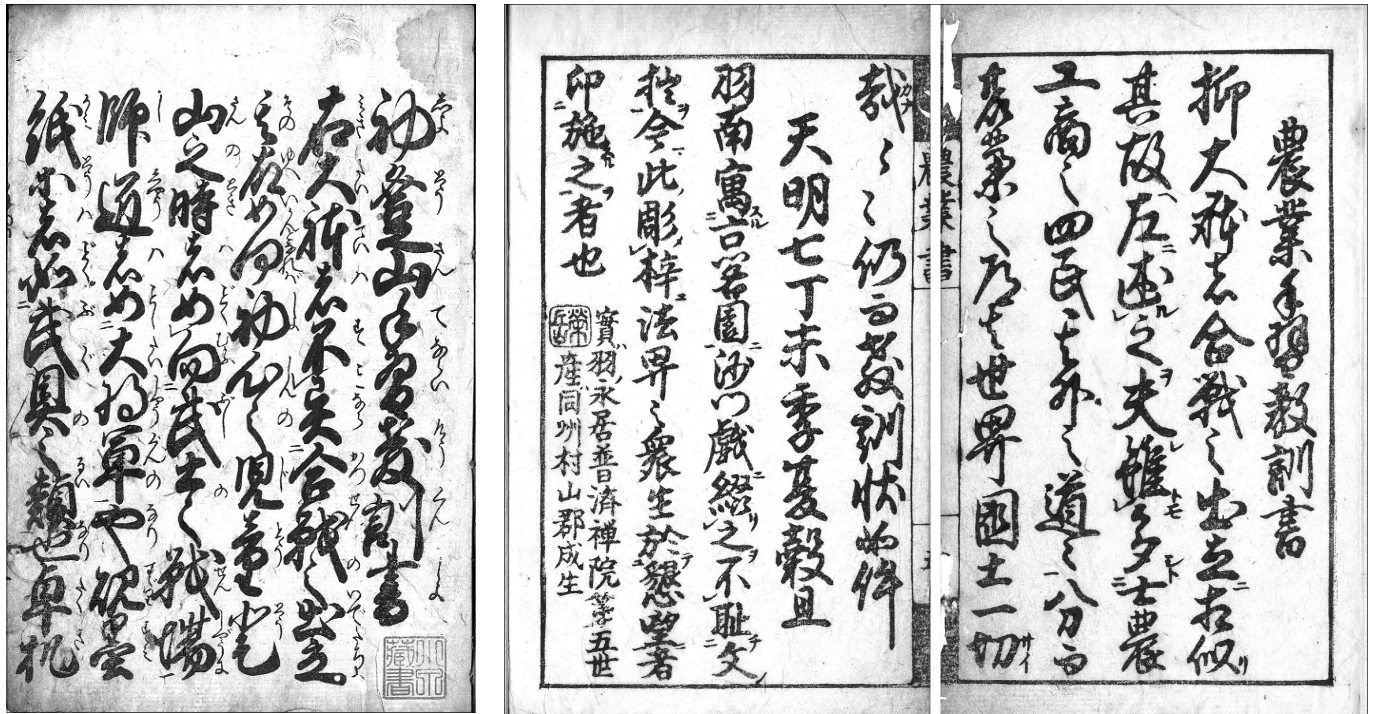


【読楽】039 「農業手習教訓書」を読む



■元禄頃刊『手習状并含状』冒頭

「農業手習教訓書」の概要 *『往来物解題辞典』による

〈新板豊年〉農業手習教訓書

【作者】栄岳(普濟禪院第五世)作・書。

【年代】天明7年(1787)作・刊。[米沢]普濟禪院蔵板(施印)。

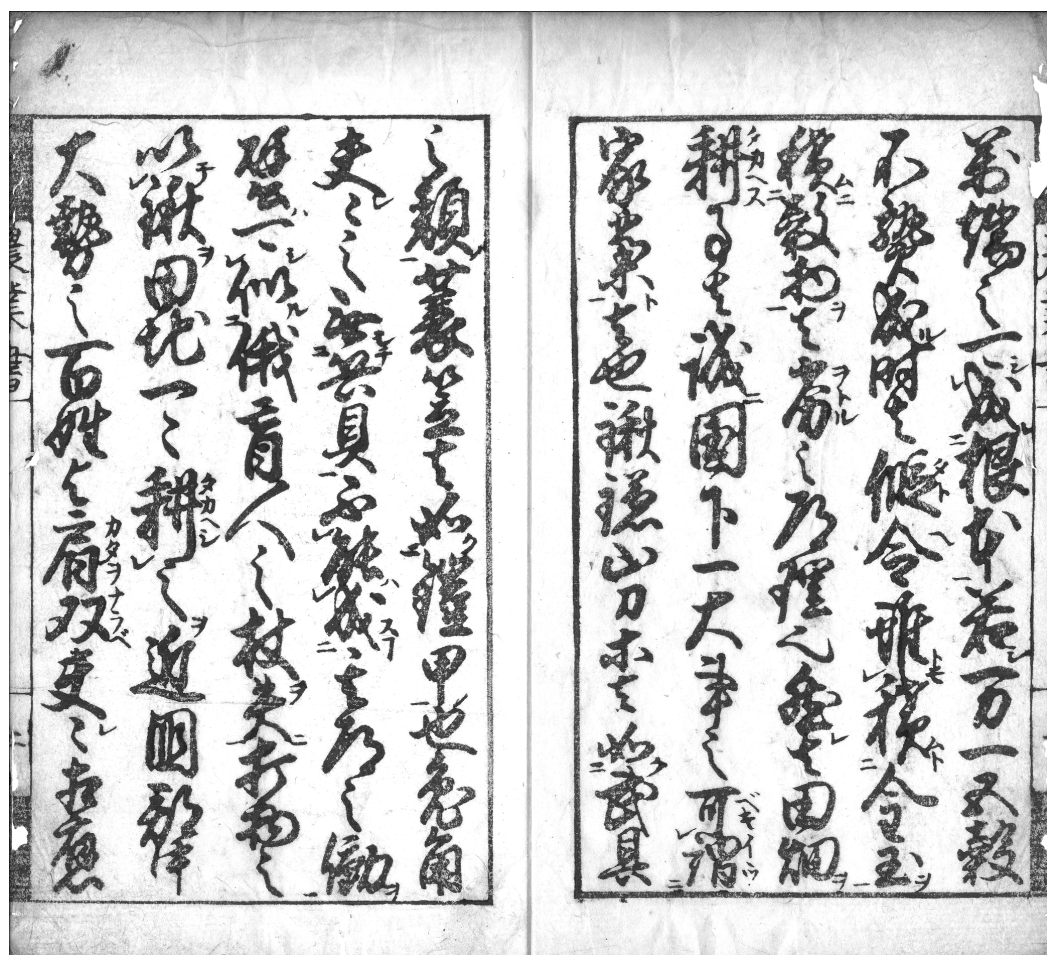
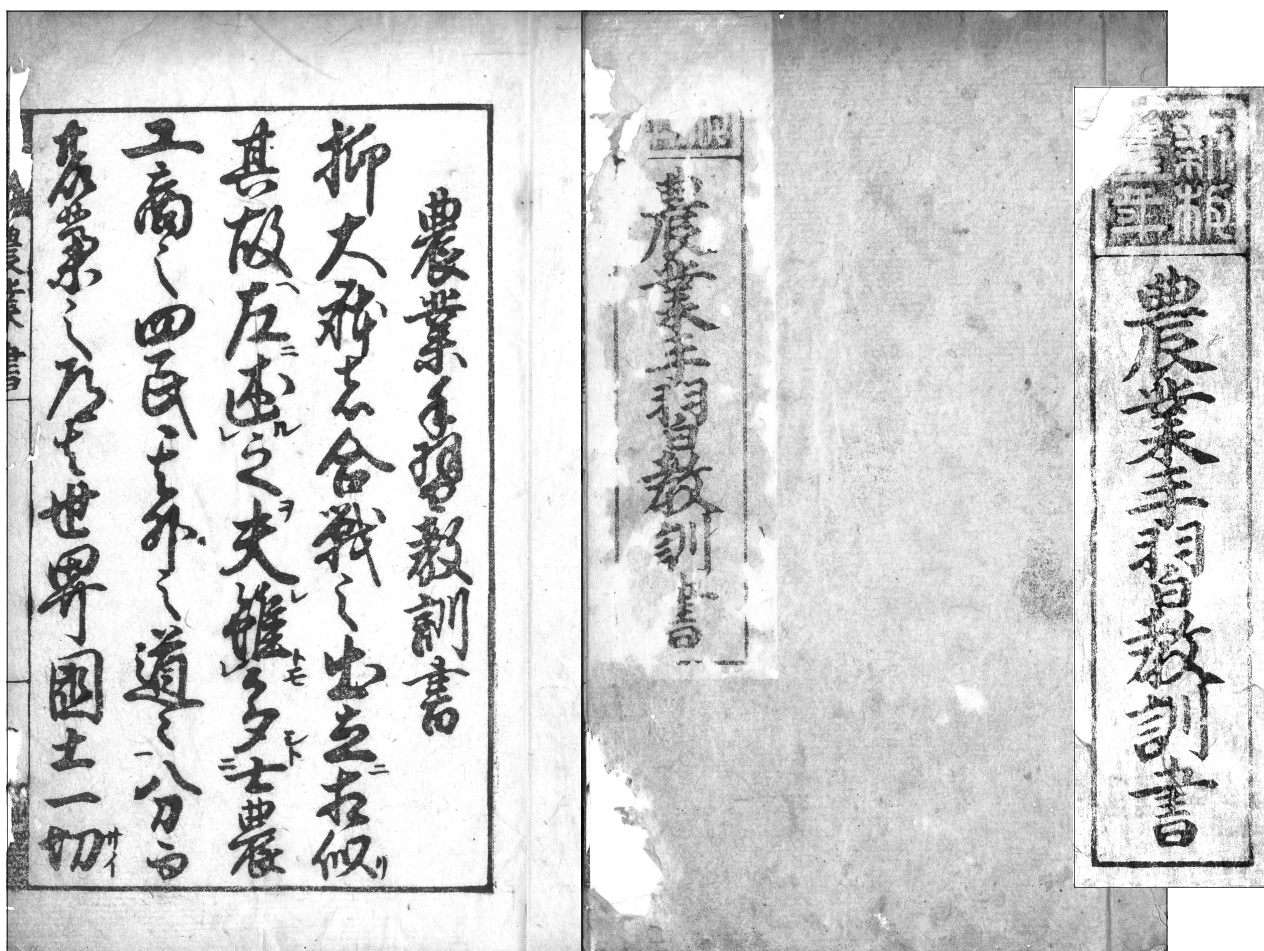
【分類】産業科。

【概要】異称『農業書』。大本1冊。西村明観作・文政5年(1822)刊『農家手習状』とは別内容。江戸初期から普及した『初登山手習教訓書(手習状)』を模倣して農業心得を記した往来物。「抑、大躰者合戦相似。其故左述之。夫、雖多土農工商之四民其外之道々、分而農業之道者、世界国土一切万端之可成根本…」と筆を起し、まず田畑耕作が「国下(家)一大事」たることを述べ、続いて、武具に匹敵する農具の重要性、さらに、一年間の耕作上の注意や農民生活の心得、人倫五常の道などを説く。本文を大字・五行・無訓で記す。天童成生出身の僧・栄岳が、天明飢饉に際して寺子や檀家の人々の救済のために著し、私財を投じて上梓し、施本とした点で貴重。なお、出版地の普濟禪院の所在は、現在のところ不明である。

【所蔵】山形教育・伊藤・謙堂(重写本)



「農業手習教訓書」を読む *本文全文



之隨分限人々一勵擧力事
 行心一大より先王耕耨
 事追て一切く種おと國豊考
 前付くも入喜亦少く成業未
 不考人棟流氣付お出花とら

志肝要之然別秋之比とあ
 仍おく実入升月元首日也
 一行己んてとあ又お其年
 之貞安穩速上初迎歳僮
 意之依之誠米之善歳且く

一音一々自面白く調一信全
 如おのり時と一切く職を建別
 不とお遠右人へ信者有餘力
 学文と云次も不諸く藝能
 少も心解の考を吹着又誰ん

油のと族もと角汁の能心奪
 先租代くく讓失を身と不飛
 疑立法人先達と之んへお出
 不く根の在魚と之出機不勤
 毫可謂て下く玉城と善と又

古人之語云計一月者鷄鳴之
 不記日果宜計一月者朝旦之
 不記日儀宜計一年者陽春之
 不耕秋日宜計一期者幼稚之
 不學先德宜計大畧是亦之

終心入常之月之仁義
 礼智信之不及之考之
 常之云と申刻は時辰を急不
 世希成るの目本周の見勞友

哉々々仍言教訓状如件
 天明七丁未季夏穀且
 羽南寓言言園沙の戲綴之不耻文
 控今此彫梓法界之衆生於懇望者
 印施之者也

實羽永居垂普濟禪院第五世
 産同州村山郡成生

【参考】「書写書道」連載第25回「飢饉の最中に人道を説いた『農業手習教訓書』」（2020年4月号）

天明の大飢饉で全国各地に餓死者が続出する一方、領民救済策を優先した米沢藩。そんな時勢に自費出版された『農業手習教訓書』には、「明日のために今日を全力で生きよ」という「計画即実行」のメッセージが込められています。

前回に続き、今回は『手習状』を模した天明七年（一七八七）刊『農業手習教訓書』を取り上げる。本書は、『手習状（初登山手習教訓書）』の冒頭部、「右大躰は、合戦の出立に異ならず。其の故如何となれば、初心の児童登山（入学）の時は武士の戦場に向かふが如く、師匠は大將軍の如くなり…」(原準漢文体)に準じて、「抑も、大躰は合戦の出立に相似たり。其故、左に之を述ぶる。夫れ、土農工商の四民、其外の道々多しと雖も、分けて農業の道は、世界国土一切万端の根本成るべし…」で始まる農家子弟向けの「手習状」である。

著者は、普濟禪院第五世の栄岳で、巻末に「羽州村山郡成生（現・山形県天童市）出身」の旨を記す。普濟禪院は現・米沢市窪田町の曹洞宗・普濟寺という。

内容は、先の冒頭部に続いて「五穀が不熟の時は、どれほど金玉を積んでも穀物を積むには及ばない。その道理からして、田畑耕作は国家一大事の家業である」と述べ、「鋤・鎌・山刀は武具、蓑・笠は鎧・甲に等しく、農具がなければ家業の務めができないのは盲人が杖を失うのと同じと説く。続いて、一年間の耕作や農民生活上の心得や人倫を諭すが、その要点（意識）は次の通りである。

○春・夏の農作業を注意深く行い出精すれば、秋の収穫は意のままとなる。冬の年貢上納も速やかに終え、新年を行事も意のままに行って富を分かち合い、正月の朝の一首一句にも面白い言い回しが浮かぶであろう。

○こう考えると、あらゆる職分に違いはない。古人の語に「余力あらば文を学べ」とあるように、まず余力学問を心懸け、その次に他の芸能を少しは嗜むべきであろう。

○耕作をおろそかにして油断する族は、その身の恥辱に止まらず、先祖代々の遺産を失い、身の置き所をなくし、一族のリーダーにはなれない。それぞれ生まれ得た根気（気力や能力）相応に家職に励み努めぬ者は、天下の国賊である。

そして最後に、日々の指針としての「四計」、すなわち「一日の計（は鶏鳴（夜明け）に有り。鶏鳴に起こさずんば日果（一日の成果）空し」「一月の計は朔旦（朔日の朝）に有り。朔旦に礼（挨拶）せずんば公儀（公の事）空し」「一年の計は陽春（正月）に有り。陽春に耕さずんば秋日空し」「一期（一生）の計は、幼稚に有り。幼稚に学ばずんば老いて後空し」の語を掲げ、「五常（仁・義・礼・智・信）は文字通り常に守るべき人の道であるが、これを一心に実行する者は稀である。なんと痛ましいことか」と訴えて結ぶ。

ただし、四計を単純な「計画」と解釈してはならない。計画よりもむしろ具体的な実践に重きがあることは、本書の記述からも明らかだ。早朝の行動が一日を決める、朔日の取り組みがその月の結果となる、年始の努力が年末に成果となって表れるという、あくまでも「計画即実行」の教えである。

本書は、天明の飢饉直後に、栄岳が檀家のために著し、私財を投じて上梓した施本であった。天明大飢饉は全国で餓死者三〇万人以上と言われ、杉田玄白は『後見草』で、死者の肉をあさり食う者や死肉を切り売りする者、果ては「小児の首を切って頭皮を剥ぎ取り、焙り焼きにし、頭蓋骨の割れ目にヘラを差し入れて脳味噌を食べる者もあった」と地獄絵図のような惨状を伝えている。餓死者が溢れる状況なら、本書の影響も疑問だが、幸い、上杉鷹山治下の米沢藩では全ての穀物が放出され、領民の犠牲は最小限に止まった。このような善政に感じ入ればこそ、栄岳は、日々の努力と人道を訴えずにはいらなかったのであろう。

■天明の飢饉の様子（飢えに耐えかね乳飲み子は乳房を、少年は父のもも肉を食いちぎる。小田切春江編、明治18年刊『凶荒凶録』より）

